

## ヴィクトリア朝期イギリスにおけるオオカミ絶滅の問題

志村 真幸

### はじめに

コナン・ドイルに“ The King of the Foxes ”という短篇がある。1898年、Windsor Magazine ( 8 巻 2 号 ) に発表されたユーモア小説で、キツネ狩りを戯画化している。以下のような話である。

1872年頃の出来事という。アルコール中毒気味のダンベリーという若者がキツネ狩りをしていると、突然、猟犬たちが異常な興奮を示して臭跡を追い始めた。果てしない追跡の末にダンベリーが獲物に追いつくと、なぜか猟犬たちが恐怖の声をあげていた。喉を食い破られた猟犬の死体も転がっている。やがて目の前に飛び出してきたのは、キツネではなく、巨大な灰色の獣であった。ダンベリーは全速力で逃げ出し、やっこのことで家に帰り着いたが、獐猛な赤い目と鋭い牙がちらついて見える。ダンベリーは飲み過ぎによる幻覚だと思い込むが、医者が読み上げてくれた新聞には、意外な真相が報じられていた。獣の正体は「シベリア産の...ハイイロオオカミ<sup>1</sup>であった。どこかの移動動物園から逃げ出したものと思われる」<sup>2</sup>だったのである。オオカミはヒツジを襲っているところを、駆けつけた農場主に射殺された。

ブラム・ストーカーのDracula ( 1897 ) にも同様のエピソードがある。<sup>3</sup>ドラキュラが、ロンドンの動物園で飼育されていたノルウェー産オオカミを脱走させ、ルーシー・ウェステンラを襲う道具として使うのである。<sup>4</sup>

ヴィクトリア朝のイギリスは、国外からの侵入者に怯えた時代であった。<sup>5</sup>東欧やアジア、アフリカからの外国人がイギリスに害をもたらし、やがては侵略されるのではないかという不安が存在したのである。この問題について、筆者は人間だけではなく、動物についても分析する必要があると考えている。つまり猛獣の侵入の危険である。これは19世紀のイギリスがアジアやアフリカに植民地を拡大したことと関係している。そこには無数の大型肉食獣が生息していたのである。アフリカにはライオン、リカオン、チーター、ジャッカルなどがあり、インドにはトラ、ヒョウ、オオカミがいた。いずれも人間や家畜を襲う凶暴な動物であった。実際にイギリス人官僚や

入植者、現地人が犠牲となる人食い事件が多発した。たとえばツァヴォのマンイーター事件がある。1898年、ウガンダ鉄道建設中に2頭の人食いらイオンがあらわれ、数十人が犠牲になった。<sup>6</sup> 植民地経営にあたっては、これらの危険な動物に対処していく必要があった。<sup>7</sup>

こうした状況が、イギリス本国への猛獣の侵入という不安を生み出したのである。不安は、主としてフィクションの世界にあらわれた。たとえば、H. G. ウェルズのSF小説には、侵入してきた動物にイギリス人が食べられるというテーマが頻出する。<sup>8</sup>

まさにこの時期、イギリスではオオカミへの関心があらわれるのである。さて、ドイルとストーカーのオオカミは、いずれも外国産のものであった。なぜか。それは、当時のイギリスにオオカミは生息していなかったからである。かつて、イギリスには多くのオオカミがいた。しかし、イングランドでは15世紀に、スコットランドとアイルランドでも18世紀半ばには姿を消してしまう（なお、クマは遅くとも7世紀には絶滅している）。すなわち、ヴィクトリア朝のイギリスには猛獣は生息していなかったのである。猛獣のいない国であったからこそ、ライオンやトラと出くわしたときの衝撃も大きかったと思われる。

オオカミへの関心は、まず、「最後」のオオカミについての物語としてあらわれる。つづいて、絶滅の過程を明らかにしようとする科学的な研究が行われる。本稿では、これらの言説を史料として扱っていきたい。オオカミの絶滅という問題は、外部からの「危険」の侵入が懸念された時代であって、どのような意味を持ったのか。

## 1 「最後」のオオカミの物語

最初に取り上げるのは、イギリスの「最後」のオオカミを描いた物語である。オオカミは野生の動物であり、山中や森を生息場所とする。そのためオオカミが本当に絶滅してしまったのか、それともどこかに生き残っているのかは、ずっとわからないままであった。<sup>9</sup> それを確定しようという試みが19世紀前半に行われるようになるのである。「最後」の物語では、イングランド、スコットランド、アイルランドの「最後」のオオカミが、それぞれに語られるのが普通である。なお、多くは逸話集や昔話集に含まれるかたちで出版されている。1830年にラウダーのAn Account of the Great Floods of August, 1829、1838年にスクロープのThe Art of Deer-Stalking、1848

年にステュアート兄弟のLays of the Deer Forest、1855年にボウイのThe Black Book of Taymouth、1860年にキャンベットのPopular Tales of the West Highlands、1865年にハントのPopular Romances of the West of England、1884年にメルシエ夫人のThe Last Wolfが出ている。このほかThe Irish Penny Journalなどにも記事が掲載されることがあった。

これらのうち、イングランド、スコットランド、アイルランドから一例ずつ取り上げ、検討してみたい。

## A . イングランド

メルシエ夫人のThe Last Wolf: a Story of England in the Fourteenth Centuryを取り上げる。イングランドのオオカミの最期を描いた長編詩である。

メルシエ夫人（生没年不詳）には、ほかにOur Mother Church（1886）、By the King and Queen: A Story of the Dawn of Religion in Britain（1886）などの著作があり、宗教色の濃い教訓的な読み物の作家であった。The Last Wolfもキリスト教知識普及協会の発行による。

物語の概要は以下のとおりである。1281年、エドワード1世は、廷臣のサー・ピーター・コーベットに、王国内のすべてのオオカミを殺すよう命令を下した。フォレスト（王室の狩猟用地）のシカがオオカミに食べられる事件が相次いだためである。コーベットは配下の騎士たちと猟犬を従え、グロスターシャー、ヘレフォードシャー、ウスターシャーなどでオオカミを殺し続け、数十年が過ぎる。コーベットはオオカミの逆襲を受けて殺されてしまい、部下のサー・ジョン・ハンティントンが任務を引き継ぐ。やがてハンティントンは最後の頭をウェストモーランドのハンフリー・ヘッドに追いつめる。「最後」のオオカミは果敢に抵抗するが、ついに息絶える。オオカミの最期は次のように描かれている。「牙を剥き出し／（ハンティントンの）胸を爪で傷つけ／オオカミは倒れた／恐ろしい叫び声をあげながら」<sup>10</sup>

この物語はカンブリア地方に残る伝承をもとにしている。ハンフリー・ヘッドは現在のカンブリアの南部にある石灰岩の崖である。イングランド最後のオオカミが殺された場所として、いまでは半ば観光地化されている。崖の西面がオオカミの頭部に見えることから、伝承が生まれたともいわれる。コーベットは実在の人物で、エドワード1世からオオカミ狩猟官に任命された記録が残っている。イングランドでは、ほかにヨークシャーのイ

ースト・ライディングやコーンウォールに、「最後」のオオカミの伝承が残っている。

## B . スコットランド

ラウダー（1784-1848）のAn Account of the Great Floods of August, 1829, in the Province of Moray, and a Adjoining Districtsを取り上げる。

ラウダーはエディバラ生まれの小説家・博物学者であった。小説家としてはスコットと交流があり、「オオカミ」と呼ばれる男を主人公としたThe Wolfe of Badenoch. An Historical Romance（1827）など多くの歴史小説を残している。また、地域の伝承に関心を持ち、Legendary Tales of the Highlands（1841）などを執筆した。博物学者としては、Biographical Sketch of Baron Cuvier（1834）のほか、オウムについての著作がある。伝承収集家と博物学者の両面があらわれたのが、An Account of the Great Floods of August, 1829であった。同書はスコットランド北東部のモレシャーで、嵐によりフィンドホーン川が氾濫、大洪水となった事件を記録したものである。しかし、同地の伝承にも頁が割かれており、そのなかにスコットランド「最後」のオオカミの話がある。

以下のような物語である。1743年、フィンドホーン川の谷間に「オオカミと思われる巨大な獣」があらわれ、二人の子どもが殺される事件が起きた。すぐさま男たちが集められ、オオカミ退治が行われることになった。ポール・アクロレインのマックイーンにも声がかけられた。マックイーンはディア・ストーキング（シカ狩り）の名手として知られる大男で、ロング・ドッグと呼ばれる猟犬を従えていた。しかし、マックイーンはあらわれず、退治も失敗した。ところが、数日後、マックイーンは大きな黒いオオカミの頭をぶらさげ、姿をあらわした。そして「丘の東の峡谷に出たところで、獣と出くわしたんです。ロング・ドッグが飛びかかっていたんで、俺も加勢してナイフで斬りつけました。それから喉を掻き切ってやったんです。生き返るかも知れないと思って、頭を持ってきました。剣呑な生き物ですからね」<sup>11</sup>と語ったのであった。マックイーンは褒美としてシーン・アシャンの土地を与えられたという。

この話はモレシャーでラウダーが採集したものである。これ以外にも、ハイランド北部には、いくつか、「最後」のオオカミが殺されたという場所が残っている。

### C. アイルランド

リチャードソンがThe Irish Penny Journal (1841年5月8日)に寄稿した記事を取り上げる。

リチャードソン(1801-65)は、軍人としてインドに赴任した経験を持つ出版者であった。カルカッタでThe Calcutta Literary Gazetteの編集に携わったのをきっかけに、帰国後も多くの新聞や書物を手がけた。The Irish Penny JournalにもH. D. R. の署名でしばしば寄稿している。

記事の概要はこのようなものである。アルスターのタイロン地方には、遅くまでオオカミが残り、人々を苦しめた。特にヒツジやウシへの害がひどく、夜間は石壁を巡らした囲い地に入れて守っていた。それでも壁を乗り越えてオオカミが侵入する事件が起こり、ローリー・カラフという高名なオオカミ・ハンターが呼ばれることになった。カラフは二頭のウルフ・ドッグ(獵犬)と12才の少年を連れてやってきた。オオカミは二頭いた。囲い地は二ヶ所あり、いつも両方が同時に襲われるのであった。そのため二手に分かれて見張りをすることにした。カラフは少年に槍を渡し、喉を狙うようにと言い残すと、もう一方の囲い地に向かった。「少年はすぐに囲いの扉を開けてなかに入り、入口のそばに座りこんだ。忠実な友(ウルフ・ドッグ)は油断なく、少年の脇にうずくまった。その夜はとても暗く、寒かったので、哀れな少年の手はかじかみ始めた。やがて少年は眠ってしまった。イヌが低いうなり声をあげたのは、恐ろしい敵が飛び降りたときだった。少年はイヌをけしかけ、教わったとおり、オオカミの喉に槍を突き刺した。そこにちょうどカラフが戻ってきた。カラフの手にはもう一頭の頭がぶら下げられていた」<sup>12</sup>

リチャードソンによれば、これは1690年代の出来事であるという。1829年にベルファストで出た逸話集から取ったというが、書名などは明らかでない。この話そのものの信憑性はわからないが、カラフは実在のオオカミ・ハンターであったことが確認されている。<sup>13</sup> アイルランドには、全土に「最後」のオオカミの話が伝わっている。

以上の3点には、いくつかの共通した特徴がある。第一は、まったくの創作ではなく、各地で採集された伝承をもとにしている点である。すなわち、これまで地域のなかでは語り伝えられていた伝承が、採集・物語

化・出版されることで広く知られるようになったのである。

第二は、オオカミは「退治」されて死ぬということである。構造は明確で、オオカミが人間に害をなし、その結果として殺される。メルシエ夫人の物語では、フォレストのシカに害をなすことでエドワード1世の怒りを買った。ラウダーの物語では、子どもを食ったために退治された。リチャードソンの物語では、家畜を襲ったことで殺される。すなわち、オオカミは人間に害をなす動物であるがゆえ、退治されなければならないのである。それは貴重な「最後」のオオカミであっても変わらない。保護されて檻の中で一生を終えたり、自然な死を迎えたり、人間の友になったりすることはない。

第三は、オオカミの絶滅が肯定的に評価される点である。オオカミを絶滅させてしまったことについて、後悔や反省はない。オオカミは完全な悪者であり、絶滅は喜ばしいことだった。これは、現代的な動物保護の観点とは正反対である。たとえば、日本ではニホンオオカミの絶滅を悲しみ、取り返しのつかない失敗とするのとは明らかに異なる。

第四は、退治にはつねにハンターが関わっている点である。ハンティントンにはオオカミ狩猟官であり、マックイーンはディア・ストーキングの名手であり、カラフはオオカミ・ハンターであった。シカを食べられた国王、子どもを殺された親、ヒツジを盗られた農民など、被害に遭った人たちが直接に退治することはない。かならず退治の専門家が乗り出してくることになっている。

以上の四点はどのように解釈すべきだろうか。

## 2. オオカミの絶滅

続いて取り上げるのは、オオカミの絶滅についての科学的な研究である。19世紀の半ばすぎから、学術的な雑誌にいくつかの論考があらわれている。1854年、Ulster Journal of Archaeologyに、アーチボルドとベルの“Wolves in Ireland”が出た。The Zoologistには、1862年にテナントの“Wolf Days of Ireland”、1877年にグラブの書簡が掲載された。1880年にはハーティンクのBritish Animalsが出版されている。これらは「最後」のオオカミの物語に刺激されて発生したものと考えられる。いずれの研究も、複数の「最後」の物語に言及しているためである。しかし、物語だけに頼るのではなく、考古学的な発掘や文書記録の渉猟により、絶滅の過程を明らかにしようとし

ている。

なかでも集大成とされるのが、ハーティング(1841-1928)の*British Animals : Extinct within Historic Times*である。ハーティングは狩猟に関わる著述家であり、1870年から雑誌*The Field*の編集者を務めている。同誌は狩猟を中心に据え、国内の狩猟事情のほか、アジアやアフリカの猛獣狩りについての記事を掲載した。ロンドンの事務所にはゴリラやトラの剥製が飾られていたという。冒頭で触れたツァヴォのマンイーター事件についても、最初に報道したのは*The Field*であった。この雑誌の編集者となることで、ハーティングは内外の狩猟情報の中心に位置することができた。その結果として多くの狩猟書が生まれた。*Hints on Shore Shooting*(1871年)、*Hints on the Management of Hawks*(1884年)、古い狩猟書をまとめた*Bibliotheca Accipitraria*(1891年)などである。これらの著作を通して、ハーティングは狩猟に関する文献学者としての名声を確立していく。またリンネ協会と動物学協会に所属し、1877年からは*The Zoologist*の編集にも携わった。こうした人物がオオカミの絶滅について書くということには、どのような意味があったのか。

*British Animals*には、有史以降にイギリスで絶滅した5種の動物が取り上げられている。オオカミ、クマ、ビーバー、イノシシ、トナカイの5つである。とりわけ重視されているのがオオカミであり、全体の頁数の半分近くを占めている。内容は、各地に残るオオカミ関係史料を分析・検討したもので、オオカミ絶滅の過程が明らかにされている。考古学的な調査記録、地方の文書、法令など各種の史料が手広く扱われており、多様な側面からオオカミの絶滅に迫っている。また、他の研究がしばしば伝承や記録を鵜呑みにしているのに対して、ハーティングは個々の史料についての吟味もきちんとしている。そのため、現在でも信頼に足る研究として評価が高い。<sup>14</sup> それでは、ハーティングがオオカミの絶滅についてどのように論じているか見ていきたい。

本章では、ハーティングがオオカミの絶滅の原因について、どのように考えていたか明らかにしたい。まず、冒頭で指摘されるのは有史前のイギリスに無数のオオカミが分布していたという事実である。ところが、人間が住みつくとともに絶滅に向かうことになった。なかでもエドガー王(在位943-975)の治世、急激に数を減らしたという。エドガーは支配下にあったウェールズのラドウォル王に、毎年、300枚のオオカミの毛皮を納めるよう要求した。ウェールズとの国境地帯の森にはオオカミが多く、旅人への

襲撃やシカへの被害が絶えなかった。そのため退治が命じられたのである。ラドウォルは3年間にわたり毛皮を納めつづけた。しかし、4年目には狩るべきオオカミがいなくなってしまう、300枚を用意することが出来なかったという。

以下、オオカミ退治の記録が次々と紹介される。特に多いのは、フォレスト・ローにもとづくオオカミ退治である。フォレスト・ローとは、王室の狩猟用地であるフォレストを取り締まる法律で、ハンティングの獲物として保護すべき動物を定め、近隣住民のフォレスト内での活動に制限を加えた。「保護」とは、王室および許可を受けた人間以外は捕獲してはならないということであり、現代的な動物保護とは意味合いを異にする。1016年、クヌート王の制定したフォレスト・ローには、「キツネおよびオオカミは…ハンティングの獲物ではなく…誰が殺しても良い」<sup>15</sup>とある。オオカミは「(ゲームである)ノウサギとシカ…(を襲う)捕食獣である」<sup>16</sup>がゆえに、退治すべき害獣と見なされたのである。また、フォレスト・ローにもとづき、オオカミ狩猟官が任命されることもあった。メルシエ夫人の物語に登場したコーベットもそうである。ヘンリー2世治下には、ニュー・フォレストでシカやイノシシが被害に遭い、1164年にブリタニー公が命じられてオオカミ狩りを行った。ジョン王治下の1209年には、イーヴリン・シブレイがオオカミを狩る全権を与えられて職務に励んだ。ヘンリー3世(在位1216-72)は熱心にオオカミ狩りの勅令を出し、臣下のエンジェーヌに命じて狩り出しを行った。このときには王の獵犬が使われたという。ヘンリー4世(在位1399-1413)はトマス・ド・エイルズバリーを害獣退治官に任命した。害獣とされたのは、オオカミ、キツネ、オオヤマネコであった。

以上からは、前章で指摘したのと同様の構造が認められる。すなわち、オオカミが旅人を襲ったり、フォレストの獲物に被害を与える。すると王によってハンターが任命され、彼らがオオカミを退治する。結果としてオオカミは数を減らしていく。そして、イングランドではヘンリー7世治下、スコットランドでは1743年、アイルランドでは1770年(もしくは1766年)に絶滅したと結論づけるのである。<sup>17</sup> すなわち、ハンターによる退治こそが、オオカミを追いつめて絶滅に向かわせた原因であるとハーティングは考えていた。実はこれは現在の研究では否定されている。オオカミ研究者のツィーメンによれば、「ヨーロッパでオオカミを絶滅させるのに成功した最初の国はイギリスである。ただし、オオカミ獵師たちや狩りの好きな騎士たち、オオカミに苦しめられた農民たちの功績ではなく、ブリテンの森の破



壊によるものである」<sup>18</sup>とされる。つまり、中世から近代初期にかけてイギリスの国土が開発されたことで、オオカミは生息場所や獲物を失い、絶滅したとするのが現代の学説なのである。ところが、ハーティングはそうは考えなかった。あくまでも人間による退治の結果とみなしていたのである。

前章と合わせて、ここでひとつの小結を行っておきたい。「最後」の物語は、一般の人々がオオカミ退治について語ったものと位置づけられる。オオカミという猛獣に対して、一般の人々は退治すべき技術や道具を持たない。それゆえ、ハンターが駆り出されることになる。ハンターは安全を守ってくれる存在なのである。これに対してハーティングはハンターの側にいる。ハーティングは王のフォレストへの害を強調する。ハンターは一般の人々を守るだけではなく、イギリスという国家の守護者として描かれているのである。「最後」の物語とハーティングの著作から読み取れるのは、このような構造である。そして、この構造はヴィクトリア期のイギリスが直面した、猛獣の侵入という問題への対策を示唆する。すなわち、オオカミを絶滅させたという経験は、過去の成功例として意味を持ったのである。

しかし、オオカミ退治の記憶は本当に有効なものだったのか。ハンターたちがオオカミを狩ったのは、安全を守るためだけだったのか。次章は、ハーティングの言説について批判的に検討することから始めたい。

### 3. 狩 猟

ハーティングの著作を読み進めると、ひとつの疑問が浮かび上がる。退治が繰り返されることで、オオカミの数は減少する。それと呼应して被害記録も少なくなる。それにも関わらず、オオカミ狩りは続けられ、ついには一頭残らず殺されてしまう。なぜオオカミは生き残ることが許されなかったのか。見逃されたり、共存したり、保護されたりしなかったのはなぜなのか。

1342年、ブリタニー公は領内の農民に対してオオカミ殺しの禁令を出した。マスチフ<sup>19</sup>などの番犬を飼うことも規制された。本来、牧羊犬には2種類がある。コリーなどヒツジを集めるイヌと、マスチフなど番犬となりオオカミと戦うべきイヌである。このうちマスチフ型は、オオカミを傷つける可能性があるとして飼育できなくなったのである。すなわち、フォレスト・ローで誰が殺しても良いとされていたオオカミが、逆に保護される存在となったのである。これはスポーツとしてのオオカミ狩りの発生であっ

た。エドワード1世（在位1272-1307）治下には、オオカミ狩猟官のジョン・ダンジェーヌが「楽しみのために」オオカミを狩ったという文献があり、これについてハーティングは「この動物（オオカミ）が、今日のキツネ狩りと同様に、スポーツとして狩られていたことがわかる」<sup>20</sup>と述べる。ブリタニー公の禁令も、オオカミが狩りの獲物に加えられたことを反映しているのである。

14世紀末には、スポーツとしてのオオカミ狩りが流行し、次第に狩りとしての形式も整えられていく。やがては獵期まで設定される。初期のスポーツ書として著名なジュリアナ・バーズのBook of St. Albans（1486）には、オオカミの狩りのシーズンが12月25日～3月25日と記されている。<sup>21</sup> オオカミ狩りは、以下のように行われた。農民を勢子にしてオオカミを追い立てさせ、飛び出してきたらハウンドなど足の速い獵犬に追わせる。ハンターは馬に乗って追いかける。ハウンドがオオカミに追いついたら、マスチフなど力の強い獵犬をけしかけ、弱ったところをハンターが剣で突き殺す。ハーティングも述べているとおり、近代のキツネ狩りと瓜二つといえよう。オオカミ狩りは非常に面白いスポーツであつたらしい。ハーティングは最高級の讃辞を並べ、「王侯の遊び」<sup>22</sup>とまで述べている。実際に、16世紀のスコットランドでは、王を主賓とした狩獵会が催された。1528年、アトレ伯がジェイムズ3世を招いて3日間にわたる狩獵会を開いたのがそれである。獲物とされたのはオオカミ、キツネ、オオヤマネコ、アカシカなどであった。アトレ伯は1563年にも、メアリ女王のためにも狩獵会を行っている。このときは5頭のオオカミが殺された。

16世紀以降はオオカミが絶滅寸前であるとの指摘が相次ぐ<sup>23</sup>が、依然としてハンティングは続けられる。1680年にはスコットランド「最後」のオオカミとされる個体がキャメロン卿によって狩りの獲物とされた。アイルランドでは17世紀に高名なオオカミ・ハンターが何人も出たという。<sup>24</sup> そしてオオカミは殺され尽くす。絶滅したのである。

ハーティングの描くオオカミ狩りとは、結局、次のようなものであった。「（オオカミは）羊飼いの敵であり、いつでもどこでも、可能な限り、追いつめて殺すべき獣とみなされた。また、オオカミ狩りは、古くから王や貴族にとってもっとも興奮させられる、楽しいフィールドスポーツと考えられたのである」<sup>25</sup> しかし、実際には退治とスポーツが同等の意義を持ったのではなく、次第にスポーツの側面が圧倒していったと考えられる。ハンターがオオカミを絶滅させたのは、その害から国土や人々を守るためでは

なく、狩りそのものの楽しさのためだったのである。

こうしてイギリスからオオカミは消滅した。ところが、それで終わりにはならないのである。19世紀初頭、ヨークシャーのトマス・ソントン(1757-1823)は、恐るべきアイデアを思いついた。ソントンは地元出身の軍人で、インド勤務ののち、帰国して東インド会社の役員となった。1804年に*A Sporting Tour through the Northern Parts of England, and Great Part of the Highlands of Scotland*、1805年に*A Sporting Tour through Various Parts of France in the Year 1802*を出版している。ここでいうスポーツング・ツアーとは狩猟旅行のことであり、イギリスではシカやキツネを狩った。問題となるのは、1802年に行ったフランスへの狩猟旅行である。現地でおオカミ狩りを体験し、気に入ってしまったソントンは、イギリスでもオオカミ狩りができないかと検討しはじめる。そして、つがいのオオカミをフランスから輸入し、繁殖させて野に放とうと考えるに至るのである。ヨークシャーはイングランドで最後までオオカミの生き残っていた地域であり、オオカミの定着が見込まれた。また、ハンターたちが熱狂的に受け入れるだろうとの目算があったようである。しかし、実行に移すことはできなかった。当然のことながら、近隣住民の激しい反対にあったのである。

同時期、ボーンマスのトルヴィル卿も同様の計画を練っていた。フランスからオオカミを連れてきてハイランドの原野に放し、狩猟の獲物にしようというのである。しかし、ヒツジやウマの生産者から激しい反対があり、頓挫した。

それでも諦めないハンターがいた。イギリスが駄目なら、オオカミのいる国へ行けば良い。1864年、8代ボーフォート公ヘンリ・サマーセット(1829-89)は、フランスへの旅を行った。オオカミ狩りのためである。19世紀のフランスには、多くのオオカミがいた。イギリスと違って豊かな森が残り、獲物となるシカやイノシシも充分だったのである。人間や家畜への害も頻繁で、20世紀に至るまでオオカミ狩猟官という制度が存続したほどであった。ボーフォート公家は、狩猟好きの家系として知られる。イングランド最大のキツネ狩りのグループ(Duke of Beaufort's Hunt)の主催者なのである。これは1682年に初代ボーフォート公がつくりあげ、代々、引き継がれたもので、シーズンには全国から貴紳を集め、盛大な狩猟会が催されていた。しかし、キツネでは飽き足らなくなったのか、フランスのオオカミに目を付けたのである。ボーフォート公は自慢の猟犬たちを連れ、フランス西部のポワトゥー地方に渡り、ポワチエ郊外の森でおオカミ狩り

を行った。高名なオオカミ・ハンターであるM・ドゥ・ラ・ベージュの指導を仰ぎ、数頭のオオカミを仕留めることに成功した。喜んだボーフォート公は、その後も何度かフランスを訪れ、オオカミ狩りを楽しんだという。

ここでは、ハンターは安全の守り手とはほど遠い存在になっている。むしろ国外から危険を招き寄せようとしている。ハンターはもはや信頼できる存在ではなくなっていた。狩猟が害獣退治を掲げた時代は過ぎ去っていたのである。

## おわりに

本稿では、イギリスにおけるオオカミの絶滅と狩猟という問題に光を当てた。イギリスのオオカミは18世紀には完全に姿を消す。そして19世紀前半、オオカミの絶滅が認識されるようになる。やがて専門家による研究が行われ、絶滅の過程が確定する。ここで示されたのは、人間や家畜に害をなすオオカミが、ハンターによって退治されたということであった。ハンターが国の安全を守ってくれていたのである。しかし、それは言説上・過去のことでしかなかった。現実のハンターは退治という本来の目的をはずれ、狩猟の楽しさに目覚めてしまっていたのである。度を越して、オオカミを導入しようとする動きまで出てくる。あるいは“*The King of the Foxes*”のダンベリーのよう、醜態をさらすことになる。やがて、イギリス国外でのハンティングが始まる。ボーフォート公のようにオオカミに固執した例もあるが、多くはアジアやアフリカの植民地に向かい、ライオンやトラに挑戦することになる。

## 註

- 1 オオカミ (wolf) は *Canis lupus* を指す。イギリスや日本のオオカミを亜種に分ける研究者もいるが、基本的には、世界中のオオカミを同種とみなして差し支えない。
- 2 A. C. Doyle, *The Sir Arthur Conan Doyle Reader: from Sherlock Holmes to Spiritualism*, Cooper Square, 2002, 180.
- 3 Bram Stoker, *Dracula*, Oxford University Press, 1983, 136-40.
- 4 当時、外国から持ち込まれた動物の脱走する事件がいくつか記録されている。1830年にはロンドンでトラ、1836年にはグラスゴーでヒヒ、1879年にはロン

ドンで再びトラが逃げ出して大騒ぎになった。残念ながら、オオカミの脱走事件については確認できていない。

- 5 丹治愛 『ドラキュラの世紀末 - ヴィクトリア朝外国恐怖症 の文化研究』東京大学出版会, 1997年など。
- 6 拙論「ライオンはなぜ退治されたのか - ツァヴォのマンイーターとビッグ・ゲーム・シューティング」『人間・環境学』14、2005年。
- 7 J. M. MacKenzie, *The Empire of Nature: Hunting, Conservation and British Imperialism*, Manchester University Press, 1988.  
Harriet Ritvo, *The Animal Estate: the English and Other Creatures in the Victorian Age*, Harvard University Press, 1987.
- 8 拙論「H. G. ウェルズにおける「食べられるヒト」 - 進化と食」『人間・環境学』12、2003年。
- 9 こうした状況は、ニホンオオカミの絶滅の問題ときわめて良く似ている。詳しくは、拙論「ニホンオオカミは「いつ」絶滅したのか? - 平岩米吉と南方熊楠」『熊楠研究』7、2005年。
- 10 Anne Mercier, *The Last Wolf: a Story of England in the Fourteenth Century*, Society for Promoting Christian Knowledge, 1884, 74.  
引用中の...は中略、( )内は筆者の補足である。
- 11 Thomas Dick Lauder, *An Account of the Great Floods of August, 1829, in the Province of Moray, and Adjoining Districts*, Black, 1830, 44.
- 12 H. D. R. (David Lester Richardson), "Irish Wolfhound History." *The Irish Penny Journal*, May 8th 1841.
- 13 Kieran R. Hickey, "A Geographical Perspective on the Decline and Extermination of the Irish Wolf Canis lupus - an Initial Assessment." *Irish Geography*, vol. 33, no. 2, 2000, 196.
- 14 Daniel Bernard, *L'homme et le Loup*, Berger-Levrault, 1981など。
- 15 James Edmund Harting, *British Animals: Extinct within Historic Times with Some Account of British Wild White Cattle*, Trubner, 1880, 132.
- 16 *Ibid.*, 132.
- 17 絶滅の正確な年代については、ハーティング以降に、多くの異論が出されている。イングランドはヘンリー7世治下ということで意見が一致しているが、スコットランド、アイルランドについては、現在でも確定できていない。
- 18 Eric Zimen, *Der Wolf*, Knesebeck & Shuler, 1990, 415.
- 19 ハーティングはマスチフと記しているが、現在の犬種であるマスチフとは種類が違う。大型のイヌ一般を指す名称だったらしい。
- 20 Harting, *op.cit.*, 142.

21 *Ibid.*, 160.

22 *Ibid.*, 160.

23 *Ibid.*, 169-70.

24 Hickey, *op.cit.*, 196.

25 Harting, *op.cit.*, 159.

(京都大学大学院博士課程)

## "The last wolf" in Victorian Britain

Masaki SHIMURA

A. C. Doyle, in "The King of the Foxes," wrote a story in which a wolf flees from a zoo. The wolf is one imported from Siberia. Victorian British feared that beasts might invade from abroad. Wolves had disappeared in the 15th century in England, and in the middle of the 18th century in Scotland and Ireland.

In the same period, instead, appeared many stories about "the last wolf" in which how the last wolf disappeared was depicted. British people's interest in wolves focused on the fact of their extinction because Britain had been a country where there was no wolves, that is, vermin. Wolves were got rid of by hunters because they attacked human beings, preyed on livestock and did damage to games in the Forest. Hunters should defend their country against such beasts.

Harting, in one of his works, *British animals* (1880), traces the process of the extinction. Through analysing the work I proved that wolves were disposed of as a kind of vermin, and that hunting wolves was one of the finest sports.

Colonel Thornton planned to enjoy wolf hunting and import wolves from France to leave them at large in England. Although this plan provoked a backlash in the community, he tried to bring the dangerous beasts in. Hunters abandoned their responsibility for the country.

## Romance of a Victorian Gentleman and a Maid-of-all-work Fetishism of Hands and Boots

Miho Nishimura

In this article, the relationship between Arthur Munby and Hannah Cullwick will